特259
431

菅原時保禪師

碧巖錄講演（其二十五）

投

特 259
431

臨濟宗
建長寺派管長
菅原時保禪師

碧巖錄講演

（其二十五）

昭和十五年
帝國圖書館

碧巖錄講演 其二十五 目次

第七十則　潙山請和尚道……一頁
第七十一則　五峰和尚併却……一八頁
第七十二則　雲巖和尚有也……二九頁
第七十三則　馬祖四句百非……三八頁

碧巖錄提講

第七十則　潙山請和尚道

◎垂示

垂示云、快人一言、快馬一鞭、萬年一念、一念萬年、要知直截、未擧己前、且道、未擧己前、作麽生摸索、請擧看、」

讀方

垂示に云く、快人には一言、快馬には一鞭。萬年は一念、一念は萬年。直截することを知らんと要せば、未だ擧せざる己前に於てなるべし。且く道へ、未だ擧せざる己前に作麽生か

摸索せん。請ふ擧す看よ。』

字解。

快人、』明眼、敏活、所謂拔群の人を云ふ。

快馬、』駿馬、良馬、所謂千里逐風の馬を云ふ。

萬年一念、』信心銘に、宗非促延、一念萬年、とある。蓋しそれに基きたる句。古人の句に、目擊間盡三世、一念間包十方、とある。併せ見るべし。

直截、』第二念に渉らず即時即處に於て決定する活知、活力を云ふ。

摸索、』井上君は、手がゝりを見出すこと、と云うて居らるゝ。まさに然りである。――さぐり求むる、たづねさぐる、などとも云うてよからう。

提講。

かねて申す如く、垂示は本則に對しての垂示であるから、本則に向上のことが拈提してあれば、垂示も亦隨つて向上たらざるを得ず。此の七十則の本文は師家も師家、第一流、――學者も學者、第一流。――故に垂示も、それら一流を目標として垂示せざるを得ず。久參底の者は既に百も承知。」初學の人のために聊か老婆言を弄した次第。

快人一言、』解し易く云へば、快人には一言でよし、と云ふ

意である。快人とは學者、――一言は師家。――怜悧の學者に對しては敢へて多言を用ひずとも一句半句で其の意を了得する。例せば外道問佛の如きがそれである。』快馬一鞭、』是れも、快馬には一鞭、と云ふ意である。驗馬は鞭影を見て既に走る。況んや一鞭に於てをや。云ふまでもなし、快馬とは學者、一鞭は師家。――由來、眞理とか大道とか云ふものは絶對的のもので、多辯を用ひたり饒舌を要すべきものに非ず。一もなければ萬もない。』論より證據は、萬年が一念、一念が萬年。萬年が一念に包藏され、一念が即萬年である。故に快人には一言、快馬には一鞭、それで眞理の全體、大道の全部が的々分明に露

出して居る。サァ其の僅かの處に眞理の全體、大道の全部が的々分明に露出してをる、其の端的を一見辨見する、それを直截と云ふ。例せば、慧超、法眼に、如何なるか是れ佛、と問ふ。法眼、間に髮を容れず、汝は是れ慧超、と。此の一言下に於て慧超は忽然大悟せり。』――法常、馬祖に問ふ、如何なるか是れ佛。馬祖、即心即佛、と答ふ。法常、言下に省あり。』之は直截にあらずして何ぞや。――未だ擧せざる以前に直截すべしと云はれても、其の樣子は摸索し難い。如何に摸索すべきや。それは本則そのものに親しく參じて其の妙處を悟るべし。

◎本則

舉、溈山、五峰、雲巖、同侍立百丈、百丈問溈山、併却咽喉唇吻作麽生道、溈山云、却請和尚道、丈云、我不辭向汝道、恐己後喪我兒孫、

讀方

舉す。溈山、五峰、雲巖、同じく百丈に侍立せり。百丈、溈山に問ふ、「咽喉唇吻を併却して、作麽生か道はん。」溈山云く、「却つて請ふ、和尚道へ。」丈云く、「我汝に向つて道ふことを辭せず。恐らくは己後、我が兒孫を喪はんことを。」

字解。

溈山は溈山の靈祐禪師。――五峰は五峰の常觀禪師。――雲巖は雲巖の曇晟禪師。――百丈は百丈の懷海禪師。――侍立、』弟子として師僧の傍に立つ、それを侍立と云ふ。是れ禮なり。時としては侍坐することもある。是れ又禮なり。

併却、』併はアハセ、却は除去。意は一切とりすつること。

我兒孫、』法系のこと。

提講。

或日、溈山、五峰、雲巖の三人が師家百丈大智(懷海)禪師の側に侍立して居た。圜悟禪師、下語して、「呵々々。」と大笑をされた。其の意を大内君が忖度して左の如く云うてをる。

「三人でボンヤリ老漢の側に立つて居るのは、子供がお菓子でも欲しさうにして居るやうであるぞ。老漢に貰はないでも自分等には自分等の物があるのを知らないか。」と云ふやうなアンバイだ、と。是れは大内君の直截で、果して圜悟禪師の心底、大内君の忖度の如きでありしや、それは知れぬ。呵々々。——

圜悟禪師、更に潙山等三人の意中を直截して、「君は西秦に向へ我は東魯に往く。」と云はれた。是れは直截ではない。後截である。可謂、前箭は深く後箭は淺し。——

云ふまでもなし潙山と五峰は百丈下、雲巖は藥山下。三人の中、最も幼稚は雲巖であることを忘れてはならぬ。百丈禪師、

門下生に對して慈悲徹悃である。苟も師家たる者は斯くなければならぬ。されど老婆たることを如何せん。德山であらば棒、臨濟であらば喝、であつたであらう。餘談は中止として、百丈禪師、第一に潙山に向つて問ふ、「咽喉唇吻を併却して作麽生か道はん。」サァ咽をふさぎ口を閉ぢて、一句を云うて見よ。選拔試驗だ。萬卒は得易し一將は得難し。百丈一將を得んと欲して か。——諸君、知るべし、百丈禪師の斯く問はるゝ其の言句は咽喉唇吻を併却して云はるゝ無舌無口の言句なることを。潙山の如きは所謂快人、百丈禪師の意中を直截して云く、「却つて請ふ和尙道へ。」と。之是の答、咽喉唇吻を併却しての言句

か、併却せざる言句か。諸君直截し來れ。――「咽喉を唇吻して云へるならば先づ以てあなたから。」と潙山はやつてのけた。此の樣子を或人は、「直に敵の刀を奪つて敵に差し向けた。」と評してをるが、聊か見當ちがひの直截である。――丈云く、「われ汝に向つて道ふことを辭せず、恐らくは己後わが兒孫を喪せん。」と。是れを文字言句の通りに見るもよし。臨濟が三聖の一喝に對し「我が正法眼藏は此の瞎驢邊に向つて滅却せん。」と云はれた、其れにとるも敢へて惡しからず。衲は百丈禪師第二義の咽喉唇吻併却底と直截する。果して當るや否やは百丈禪師に問うて知るべし。」文字通りに說明すれば、「我は汝に向つて云ふことは辭せぬが、若し云つたら其のために我子孫がなくなつて宗門が衰微して仕舞ふ恐れがある。――井上君は極めて面白く此の處を云うてをらるゝ。云く、「先祖代々家傳の妙藥の處方を公表してしまふと、子孫の者どもの糊口の途が杜絕してしまふ。」と。妙藥、糊口、如何にも云ひ得て當れり。衲が斯く云うて居る、是れらは咽喉唇吻を併却してか、或は然らずか、諸君の直截にまかす。」

圜悟禪師、我不辭云々の處へ、和泥合水、と下言された。如何にも如何にも、である。己れの醜態を忘れて兒孫の相手になつてをらるゝ、その爲人度生、實に有難し有難し。棒を下したり

喝を吐いたり、それが禪家の特色ではない。寧ろ和泥合水が本領である。之是の本領を實行すれば兒孫を失喪するも敢へて礙は辭せず。

◎頌

却請和尙道、虎頭生角出荒草、十洲春盡花凋殘、珊瑚樹林日杲々、』

讀方

却つて請ふ和尙道へ、虎頭に角を生じて荒草を出でたり。十洲には春盡きて花凋殘せんも、珊瑚樹林には日杲々たり。』

字解。

却請の一句は潙山の答話そのまゝ。そのまゝが雪竇禪師の咽喉、唇吻併却の一句である。

虎頭の一句は潙山答話の猛烈さを形容したるものなり、と井上君は云ふ。圜悟禪師は、不妨奇特、と云ふ。井上、圜悟、兩人共に虎頭生角出荒草の概がある。』

十洲は想像と事實と雙々底である、と或人は云ふ。然るに似たり。今は聞きしまゝを左に述べます。

一は祖洲（返魂香の產地）、二は瀛洲（芝草と玉石泉と名づくる天然酒の名所）、三は玄洲（長生仙藥の出產地）、四は長洲（木瓜、玉英）、五は炎洲（水浣布と云ふ防火用の布を出す）、六は元

洲(蜜の如き靈泉あり)、七は生洲(山川あつて寒暑なき地)、八は鳳麟洲(鳳凰、麒麟の産地)、九は聚窟洲(獅子等の怪猛獸を出す)、十は檀洲(琨吾石の出産地)、以上、諸君の知らるゝ如く、古代の支那人は(現今も或は然らん)三神山とか十洲とか種々様々の妄想鄉を想像して、不老不死の靈泉を求めたり、歡樂、安逸の材料を尋ねた故に、果してありや否やは別問題として十箇の島があるとしてある。

提講。

「却つて請ふ和尙道へ。」と百丈禪師に向つた其の猛烈さは虎頭に角を頂いて荒草裡から走り出した如き威風凜々たる處がある。圜悟禪師曰く、「幽蓋乾坤。」と。是れでこそ百丈と句々相投じ機々相應ず、と褒めた。敢へて賞讃するには及ぶまい。禪僧は元よりさうなければならぬ。さうなければ禪僧ではない。

十、洲春盡花凋殘、是れは潙山の大事了畢底で、眞常流注の花も落ち、意氣ある時意氣を添ふと云ふ春も盡き、而して下化衆生と第二義門に遊化さるゝ境界は珊瑚樹林日杲々で、散ることも盡ることもなき所謂、鯨呑海水盡、露出珊瑚枝、である、と或人は二句共に潙山禪師に見て居る。

井上君は左の如く云うてをらるゝ。

「今日の科學とか哲學とか文學とか美術とか云ふものは咽喉唇吻の所産みたやうなものである。かやうなものは丁度人間の理想鄉たる十洲の花のやうなもので、春と共に凋殘して忽ちにして見るかげもなくなつてしまふのである。されど咽喉唇吻を超越して居る絶對の眞理は南洋上の珊瑚礁の如く、十洲の春をよそに見て四時その色を變ずることなく、太陽に照らされて常に杲々と輝き、永遠にその光彩を輝やかして居る。」と。如何にも咽喉唇吻併却底を明白に說き盡してある。雪竇禪師の主意は以上二人の意見の何れに當るや。衲は衲の意見を忌憚なく吐露すれば、起承の二句は溈山を云うたもの、轉結の二句は表面、咽喉唇吻併却、千古不磨底を吟じ、裏面に百丈禪師を賞讃したものなり、と斷定する。――諸君は諸君で、諸君の力を以て虎頭に角を生じて荒草を出るがよろしい。――然れば珊瑚樹林日杲々であります。――

（昭和十四年十月二十一日講演）

第七十一則　五峰和尚併却

垂示は此の則にありません。七十則の垂示をそのまゝ轉用することが慣例であります。

◎本則

舉、百丈復問五峰、併却咽喉唇吻、作麼生道、峰云、和尚也須併却、丈云、無人處斫額望汝、

讀方

舉す。百丈復た五峰に問ふ、「咽喉唇吻を併却して、作麼生か道はん。」峰曰く、「和尚、也た須く併却すべし。」丈云く、「無人の處にて斫額して汝を望まん。」

字解。

也須併却　あなた先づ御自身の咽喉唇吻を併却なさい、の意であります。

無人處　或人は云ふ、「他に人がなかつたら、と云ふ意なり。」と。又或人は云ふ、「餘りに遠く萬里無人境に走り過ぎてしまうて、見えなくなつたぞ。」と。又或人は云ふ、「是れは百丈禪師が五峰を賞讃した句。無人處とは絶對境。」と。又或人は云ふ、「無人處とは人の寄りつかぬ處のことで、近傍する者がないこと。」と。諸說紛々たり。

『斫額』額に手をかざして遠方を望んで見る姿。――――意は其の人を貴び見上ぐること。――――

提講。

百丈禪師が溈山に問うたと同一文句を再び拈出して五峰に、咽喉唇吻を併却して作麽生か道はん、と問うた樣に文面上見えるが、實は然らず。三人に向つて一同に問はれたのである。されど其の答が三人三色で、各々見識が違つてをる。それに因つて雪竇禪師が之を三則に分けて別々に頌を作られた、と或人は云ふ。或は然らん。

五峰は、「咽喉唇吻を併却して作麽生か道はん。」と云ふ問に對して、「あなた、咽喉唇吻を併却なさい。」と逆捩を喰はせた。此の逆捩を喰はした處に共鳴して、大内君は左の如く云うて居る。

「前の溈山と同工異曲であるが、溈山の答は壁立萬仞と云ひながらも、却つて請ふ和尚道へ、と云ふ調子に多少寛和の所がある。此の五峰の答は、和尚默れ、と怒鳴りつけた。甚だ緊急である。」と。是れは大内君の見所。――――

飯田師は、「和尚自ら併却せよ、と中堅を突いた。賊馬に騎つて賊を逐ふ所は溈山に似てをるが、聊か覇氣が添うてをる。」と。是れは飯田師の見識。――――

衲は潙山に於ては其の溫和を取り、五峰に於ては其の機鋒を取る。所謂、綠に長ずるは柳、紅に優るは花。花に於ては其の紅をとり、柳に於ては其の綠を取る。百丈禪師の如きも亦復然り。

百丈、五峰の答に對して云く、「人なき處に斫額して汝を望まん。」ウー貴公の機鋒は他人の近傍するを許さずだ。禪僧としては其の機鋒なかるべからず。其の機鋒は拙僧も大いに賛成。

――流石百丈禪師だ。其の人、其の人の長所を採つて接化なさるお手元、實に恐れ入る次第である。苟も師家とならば斯くありたきものである。

◎頌

和尚也併却、龍蛇陣上看謀略、令人長憶李將軍、萬里天邊飛一鶚。

讀方

和尚也た併却すべしと。龍蛇陣上に謀略を看せしめ、人をして長く李將軍を憶はしむ。萬里の天邊に一鶚を飛ばせり。」

字解。

龍蛇陣、』是れは支那式。諸君の既に知らるゝ如く、戰國策に、有蛇於此、擧其尾、其首救、擊其首、其尾救、擊其中身、首尾俱救、』とある。その意を取りたるものなり。禪家の問答を

法戰と云ふ。臨濟錄には三玄三要の干戈甲あり。陣、是れは或本に、東方は青龍の獸なり故に龍陣と云ひ、西方は白虎の獸なり故に虎陣と云ひ、南方は朱鳥の獸なり故に鳥陣と云ひ、北方は玄武の獸なり故に蛇陣と云ふ、とある。其の他種々あるが、今は略す。

謀略、』神出鬼沒、自由自在。或時は一騎、或時は大勢、或は進み、或は退き、千變萬化の働きを抱容す。

李將軍、』此の將軍は弓の名人李廣のことである。第四則に略說しておきました。五峰に擬したのである。

飛一鶚、』此の鳥は常に深山、高岳に棲み、遠く海上に出て魚類を捕へ以て食となす、と聞く。是れは百丈に擬したのである。

――落すと云はずして飛ばすと云ふ處に妙味がある、と古人も云うて居る。

提講。

例の如く雪竇禪師の一家風。五峰の答話をそのまゝ第一句に置かれた。和尚也た併却すべし、と百丈禪師を一呑みにした機鋒、可仰可恐。』――圜悟禪師著語して、己に言前に在り了る、百丈がまだ咽喉唇吻を併却して作麽生か道へと云はざる以前に地歩を占めて居るぞ、と稱讃されたが、五峰、此の著語を聞いたら或は恐れ入るであらう。恐れ入つてこそ五峰の機鋒が

一層光彩を放つ。賞讃されて浮き上る様では其の人の輕重が知れる。昨今は實力なしと雖も實力以上に賞讃さるゝと浮上る人が多い。古人を見て一層其の嘆を深くする次第である。

五峰の衆流截斷底の活機を、「龍蛇陣上看謀略。」と雪竇禪師が二句に措かれたは雪竇禪師の謀略である。可謂、此の人にして此の人を知る。――――轉じて云く、「人をして長く李將軍を憶はしむ。」と。李廣が匈奴の射雕人を射殺したことがある。（雕は鶚のこと。）五峰は李廣其の人に比すべき力量がある。否、李廣以上の敏腕がある。何を以て證となす。云く、「萬里の天邊一鶚を飛ばす。」百丈禪師が、咽喉唇吻を併却して作麽生か道へ、

と云はれたそれを、譬へば萬里の天邊茫々として涯際なき處に一羽の鶚が目にとまらぬ疾さで飛んでをる、それを和尚也須併却、と一矢で射落したは實に神箭と云ふべし。故に圜悟禪師云く、「大衆見るや。」五峰の矢先が見えたか。名人の射發した矢先は見んと欲して見る能はず。それでこそ百發百中。又云く、「且く道へ什麽の處にか落在す。」五峰が射落した鶚は何處へ落ちた。――――更に云く、「飛び過ぎ去れり。」――――此の飛び過ぎ去れりが圜悟禪師の見識。さうなければならぬ處。石鞏、馬祖に見え、一鏃に一群を射ると云はれて大悟。――――五峰も亦是れ快人であり快馬である。――――お互も快人となるべし。快馬

にならざるべからず。

（昭和十四年十一月十一日講演）

第七十二則　雲巖和尚有也

垂示は七十則の垂示、それを以て此の本則の垂示となし、改めて垂示はありません。故に驀直に本則を拈出致します。

◎本　則

舉、百丈又問雲巖、併却咽喉唇吻作麼生道、巖云、和尚有也未、丈云、喪我兒孫。

讀　方

舉す。百丈又雲巖に問ふ、「咽喉唇吻を併却して作麼生か道はん。」巖云く、「和尚有りや也た未だしや。」丈云く、「我が兒孫

を喪せん。」

字解、分解の必要なし。

提講。

聞く、雲巖は百丈に隨侍して二十年の久しき間、參禪辨道せられたが、大悟徹底と云ふ所に到り得ず、其の内に百丈遷化。

――去つて藥山惟儼禪師の處へ往く。藥山より、「汝、二十年百丈に在つて習氣だも也た未だ除かず。」と叱られ、更に南泉の處へ往かれたが、其の機かなはず再び藥山の處へ歸り、茲に於て始めて契悟す、と。果して然らば此の本則の問答は即ち百丈の處に居りし時の事である。故に潙山や五峰と同樣に働くこと

の出來ぬは無論である。見よ雲巖の答を。和尚有也未、和尚の處にはそんな併却などと云ふものがあるのですか、と反語を用ひてをる。是が未到底の證據である。（諸說少からず、今は略す。）丈云く、「我が兒孫を喪ふ。」ア、情ない、其の樣なことを云うて居るやうでは、と深く雲巖を愍み且つ誡められた。（茲にも諸說紛々たり。）百丈の手元から云へば、我が兒孫を喪す、と云ふも咽喉唇吻併却の一句である。

一寸、注意をしておく必要がある。（老婆談と笑ふ勿れ。）始め百丈が潙山の答に對し、言ふことは辭せず以後我が兒孫を喪せん、と云はれた。それは潙山を肯うての言葉。終りに雲巖の

答に向つて、我が兒孫を喪せん、と云はれた。言葉は同樣でも、是れは肯はざる言葉である。

◎頌

和尙有也未、　金毛獅子不踞地、　兩々三々舊路行、　大雄山下空彈指、」

讀　方

和尙有りや也た未だしや、金毛の獅子は踞地せず。兩々三々舊路を行く。大雄山下に空しく彈指す。」

提講。

始めの一句、雲巖の語そのまゝを起句となされたは雪竇禪師の常例。敢へて珍重するに及ばず。要は雲巖を目前に呼び出したのである。

二句の金毛獅子は雲巖を云ふ。無論潙山も五峰も金毛の獅子である。特に雲巖を金毛の獅子と云うた所以は、衆生本來佛なり、と云ふ意味。如何なる者でも佛になる本質はある。悟らざる、是れを凡夫と云ふ。雲巖も未だ大悟せず。故に不踞地、と雪竇禪師は雲巖の心底を洞觀された。(踞地とは猫が鼠を捕へんとする時に身をすくめて地にピツタリと踞まること。虎でも獅子でもイザと云ふ場合には踞地して其の威力を現す。)

お互も或は昭和の雲巖であるかも知れぬ。本來佛であり金毛

の獅子でありながら、大悟せざるがために踞地することを知らぬ。如何にも殘念。――――

轉句の兩々三々舊路行は、直接には雲巖、兼ねて潙山も五峰も、相もかはらず舊路ばかりタドツテ活路を踏み行く者は一人もない。昔東海道を往來する馬が問屋場に到れば休むが如く、馬の一つ覺えで始終同じ處に執着して隨處自在の働きがない、と雪竇禪師の大歎息。――――昨今は特に然り。何れも何れも古人の糟粕を嘗め、先輩の葛藤を弄し、以て得たり面をして居る。若し今日の現成底を雪竇禪師が一見したならば、兩々三々、其の後の三字、何と下さるゝであらう。――――

苟も心ある法の子孫は脚下照顧せざるべからず。

結句の大雄山下空彈指、』是れは云ふまでもない、百丈禪師のこと。百丈山を一名大雄山と云ふ。――――彈指に二說ある。一は雲巖が二十年の久しい間、百丈の提撕を受けながら大悟せざる、それを百丈が齒がゆがつて彈指されたと云ふ說と、一は雲巖自ら百丈に隨學して居ても大事究明することが出來ぬ、それを殘念に思うて悄然として彈指して山を下つたと云ふ說とである。

要は百丈禪師が門下生のために、菩提心より慈悲の手を垂れ、咽喉唇吻云々の問題を拈出なされたが、それに對する答案は、潙

山と云ひ五峰と云ひ雲巖と云ひ、何れも月並流で、一つも機鋒拔群、奇想天外の活動新案を呈出し得ざりしを殘念に思はれたであらう、と雪竇禪師が忖度して斯く頌じられたのである。」

「斯くの如く百丈の心底を思ひやらるゝ雪竇禪師は、門下生の爲に手を代へ品を換へ、種々樣々接化に骨身を碎けども、超凡越格の出藍なきに會うて御座る其の實驗上から、空彈指と云ふ三字が覺えず百丈を借りて出たのであらう。」と納は忖度せざるを得ず。愁人莫向愁人說、說向愁人愁殺人。——

百丈禪師が門下生の爲に和泥合水なされた其の例極めて多し。今は略す。

以上の三則（七十、七十一、七十二）は一貫して居る問答である。故に前後、首尾、相對し相應じた處に花もあり實もあることを忘れてはならぬと知るべし。

（昭和十四年十一月十一日講演）

第七十三則　馬祖四句百非

◎垂示

垂示云、夫說法者、無說無示、其聽法者、無聞無得、說既無說無示、爭如不說、聽既無聞無得、爭如不聽、而無說又無聽、却較些子、只如今諸人、聽山僧在這裏說、作麼生免得此過、具透開眼者、試擧看、』

讀方

垂示に云く、夫れ說法者は無說無示。夫れ聽法者は無聞無得。說くこと既に無說無示なれば、爭でか說かざるに如かん。聽くこと既に無聞無得なれば、爭でか聽かざるに如かん。すなはち無說又無聽にして、却つて些子に較れり。只如今、諸人、山僧が這裏に在つて說くことを聽く。作麼生か、この過ちを免得する透關の眼を具する者なるぞ。試みに擧す看よ。』

字解。

始の四句、夫說法者云々は維摩經の弟子品第三にある、と云ふことである。故に此の文句の意義を徹底的に研究しようと思ふ人は去つて維摩經を見るべし。

說法者、』法を說くこと。

無說無示、』法は相對を離れ文字言句を超越したるもの。故に

無說無示である。』聞く、垂示に引用したる夫說法者云々の前章に、法離好醜、法無增損、法無生滅、法無所歸、法無眼耳鼻舌身意、法無高下、法常住不動、法離一切觀行』とある。以て無說無示の證となすべし。

聽法者、』法を聽くこと。

無聞無得、』聞くべきなし、得べきなし。』聞きがたし得がたしの意にあらず。

爭如不說、』說かざるがましだ。——爭如不聽、』聞かざるがましだ。——

却較此子、』井上君は云ふ、是れは唐宋時代の俗語で、「ヤヽもにも較此子である。

透關眼、』明活、又、活眼、と云ふ意に外ならぬ。——

提講。

圜悟禪師、會下の雲水僧に示して云く、「由來、法は相對を離れ文字言句を超越したものである。故に法を說くと云うて說くべき法がどこにある。隨つて法を聞くと云うて聞くべき法がどこにある。無說無示、無聞無得、そのまゝが本來の面目、本地の風光。此の本來の面目、本地の風光から云へば、無說無示がそのまゝ眞箇の說示にして、無聞無得がそのまゝ眞箇の聞得でのになつてをる」「少しは話せる」と云ふ意味である、と。如何

ある。」古松談般若、幽鳥弄眞如。――

然るに拙僧が殊更に高座に上り、古人の閑葛藤を弄して以て是を提唱と稱し、――諸君は此の座下に集まり、古人の閑言語を聽き以て主賓互に大法の擧揚、宗乘の宣傳なりと思うて居る。――それは錯、錯、大錯である。寧ろ沈默を守り、衲は閑居獨坐して居る方がましだ。

『爭如不談。』――聽者も亦然り、寧ろ安眠高臥して居る方がましだ。『爭如不聽。』――無說無聞こそ些子に較れりで、聊かトリエがある。――さすれば お互の 現成底は 些子に較らざること遠し。――此の些子に較らざること遠しと云ふ、

其の過失を免れ得んと欲せば透關底の眼を具せざるべからず。如何せば可ならん。敢へて云ふ透關底の眼を具せざる人は本則に參ぜよ。試みに左に本則を擧す。行いて看るべし。

◎本則

擧、僧問馬大師、離四句絕百非、請師直指某甲西來意、馬師云、我今日勞倦、不能爲汝說、問收智藏去、僧問智藏、藏云、何不問和尙、僧云、和尙敎來問、藏云、我今日頭痛、不能爲汝說、問取海兄去、僧問海兄、海云、我到這裏却不會、僧擧似馬大師、馬師云、藏頭白、海頭黑。

讀方

擧す。僧、馬大師に問ふ、「四句を離れ、百非を絶して、請ふ師某甲に西來意を直指せよ。」馬師云く、「我今日勞倦。汝が爲に說くこと能はず。智藏に問取し去れ。」僧、智藏に問ふ。藏云く、「何ぞ和尙に問はざる。」僧云く、「和尙來り問はしむ。」藏云く、「我今日頭痛す。汝が爲に說くこと能はず。海兄に問取し去れ。」僧、海兄に問ふ。海云く、「我這裏に到つては却つて不會。」僧、馬大師に擧似す。馬師云く、「藏頭白、海頭黑。」

字解。

馬大師、』江西馬祖山の道一禪師のこと。

四句百非、』或本に、若論涅槃、體絕百非、理超四句、と云ふ文句があります。』四句とは、第一は有、第二は無、第三は有にあらず無にあらず、第四は亦は有、亦は無。以上が四句。——四句の下に各々四句を配す。故に四々十六となる。その十六に、過去、現在、未來の三を配す。然れば四十八となる。それに已起と未起の二を配すると九十六になる。それに根本の四句を加ふ。是を百非と云ふ。要するに四句百非は、世間、出世間、都ての理論言詮を約言したものである。

西來意、』達磨大師、下化衆生の目的、佛敎の骨髓。

問取去、』行いて聽くべし。去はセヨと見てもよし。

智藏は馬大師の弟子、虔州西堂の智藏和尙のこと。

教來問』せしむるの意で、教訓の意に非ず。

海兄は百丈懷海のこと。

到這裏』四句を離れ百非を絶した所を云ふ。

却』茲では、どうも、實は、と云ふ心である。

藏頭白、海頭黑』兩人の禪機を審判したのである。――此の審判の語がそのまゝ四句を離れ百非を絶したる西來意であると見る人もある。

提講。

一人の僧が馬祖山の道一禪師に向ひ、「四句を離れ百非を絶し、達磨大師の眞骨髓を直指、お示しください。」云はば一切の

文字言句を離れ一切の相對的所作を絶し、而して達磨の眞面目を。」と云ふのである。――問僧は八萬四千の法門、五千四十八卷の經典、其の他、大乘、小乘、頓教、漸教、顯教、密教等種々色々ありと雖も何れも四句を離れ百非を絶してはをらぬ。故に眞の妙味、眞の聖境は四句を離れ百非を絶した處にあるものならん。」と思うての問である。（或は馬大師をして一泡ふかしてやらうと云ふ賊意ありてか。）圜悟禪師、問僧に向つて、「什麼の處よりか這の話頭を得來る。」自己が四句百非を離れたら此の樣な問は發せられまい。此の問をなす樣では四句百非を離れて外に何ものかあると思うて居るならん。』知らずや、四句を

離れ百非を絶し云々と云うてをる。それ、それが四句を離れ百非を絶したる西來意にあらずや。

馬師云く、「我今日勞倦、汝が爲に說くこと能はず。智藏に問取し去れ。」折角であるが、老僧今日疲れてをる。（何事かなされたものならん。或は方便か。）貴僧に說いて聞かせることが出來ぬ。智藏がをるはずだ。あれに聞くがよい。』是れが無說無示の本體にして四句を離れ百非を絶した西來意の端的である。その證據には圜悟禪師が、「身を藏して影を露す。」言葉の上では答が出來ぬと云ひながら、其の實、四句を離れ百非を絶して西來意を直指して居る。』又云く、「妨げず是れ這の老漢、別人に推

過し與ふることを。」と。智藏に問取し去れ、と、他人に讓つて逃げた其の作略は、流石馬大師は老練なものだ、と圜悟禪師も無說無示底を吐露してをらるゝ。——

問僧、事實馬大師は勞倦してをらるゝものと思ひ、老漢の語に隨ひ智藏に向つて、「四句を離れ百非を絶し某甲に西來意を直指したまへ。」と問うた。如何にも正直。正直の頭に神やどると云ふから、正直が何より大切だ。圜悟禪師は問僧の言句に轉ぜらるゝを注意して、「蹉過也不知。」最初から失敗つゞけだ、それがまだ知れぬか、と老婆のコヾト。藏云く、「何ぞ和尙に問はざる。」その樣なことは拙僧に問はずに和尙（馬大師）に問ふべき

である、と突き放した。其の機輪の轉じ方は如何にも禪僧らしい。(茲に無說無示の妙味がある。)故に圜悟禪師、間に髮を入れず下言して、「草裏より焦尾の大蟲が出て來た。意外々々、尋常一樣の答をなすかと思ひの外、突然猛虎が莽々たる草の中から飛び出た。是れには何人と雖も一驚を喫せざるを得ず。」――問僧云く、「和尙來り問はしむ。」正直と云へば正直であるが、馬鹿正直。何とか他に云ひ樣があらうに。圜悟禪師曰く、「又しても人の處分を受く。少しも自己自由の働きがない。」――藏云く、「我今日頭痛す。汝が爲に說くこと能はず。海兄に問取せよ。」(茲にも無說無示の妙味がある。)如何に親子の間柄とは云へ、前以て相談したかの如く、よくも〳〵同軌が踏めたものである。古人の語に、前聖後聖、其の揆一なり、とあるが、可謂、古人我を欺かず、と。――親は勞倦、――子は頭痛。――親は、子に問へ。――弟は、兄に問へ。――能く步武が一貫したものだ。圜悟禪師、馬大師親子の心中を忖度して曰く、「妨げず、是れ八十四員の善知識、一樣に這般の病痛を患ふ。」と。馬祖の法嗣八十四人、悉く衆生の病を我が病として接化なさるが、それを賞讃された。――僧去つて海兄に問ふ。亦復他の言句に轉換せられ、自ら好んで辱を買ひ步くは實に可愍千萬である。(此の僧に似たる擧動をなす、その人、現今は特に多し。)

海云く、「我這裏に到りて却つて不會。」(不會の二字、重きこと千斤。)イヤその事なら拙者には分らぬ、と四句を離れ百非を絶して、西來意の端的を任運に答へられた。圜悟禪師、海兄の不會に共鳴して、「忉々を用ひざれ。」かれこれと云はぬがよい。――

如何にも、であります。――問僧は心外に法を求むるが爲に、求むれば求むるほど、尋ぬれば尋ぬるほど、法に遠ざかり法に離るゝ。――智藏と海兄を訪問して聊かも要領を得ず、止むなく元の馬大師の處へ歸り、「お言葉に隨ひ、始め智藏の處へ參りましたら是れ〳〵、次に海兄の處へ行きましたら斯く〳〵。何が何やら私にはサツパリ見當がつきません。」と一々ありしまゝを擧似すると、馬大師曰く、「藏頭白、海頭黑。」――馬大師にあらざれば黑白の眞意義は知れぬ。――此の黑、白に異說があります。參考の爲に二三添へておきます。

大内君云く、「藏頭白、海頭黑、是れは終局の裁判。是れは到底理論言詮を以てかれこれと分別すべきではない。即ち所謂無說の說をも超越した以上の消息である。況んや四句の百非の、離れるの絶するのと云ふ沙汰の話ではない。けれども强ひて他の話を以て極めて通俗に翻譯すれば、柳は綠、花は紅と云ふやうな姿にも見え、山は高く水は長しと云ふやうな調子にも聞える。」と。是れは大内君の無說無示底の說法。――

秋野師云く、「智藏の頭は白い、懷海の頭は黑い、と云つた。文字通りのことでもあるまい。そんな事ではなからう。此の言葉や文字に附かずして馬大師の本意を合點せねばならぬ。此の言葉には無限の意味がある。此の馬祖の言句中には祖師西來意もあり佛法の大意もある。」と。是れは秋野師の無說無示底の言說。――

飯田師云く、「是れは究極の判決ぢや。語中に語なきを活句と云ふ。達磨を生擒にしてつれて來た。智藏の頭は白髮でも生へてあつたか、それは俺は知らぬ。また海頭黑は百丈の頭は黑いと云ふことぢや。併しザウトウハク、カイトウコクと只讀んで

見よ。此の間何物かある、と冷暖自知するが禪の要訣ぢや。容易の看をなすまいぞ。」と。是れは飯田師の無說無示底の消息。

――

井上君は、藏頭白、海頭黑につき、支那の昔話を引いて、「或山を泥坊の團體が占據して居て、泥坊敎習所と云ふやうなものを設けて居た。勿論このやうな敎習所では、一番上手に泥坊を働く奴が上級生に定まつて居る。而して此の泥坊敎習所では、生徒の技術の巧拙によつて生徒を二組に分ち、上級生には黑い帽子を冠らせ、下級生には白い帽子を冠らせて居た。そこで、山の麓の村では、白頭の奴が出沒しても左程氣にはしなかつた

が、黒頭の奴が出没すると非常に警戒した。この事實から爾來何事に限らず、技術の巧妙なるものを俗に黒頭と云ひ、その拙劣なるものを俗に白頭と云ふやうになつたと云ふことである。日本の俗語のクロト、シロトは惟ふに黒頭、白頭を湯桶讀みにしたものである。馬大師は、智藏が海兄に問取せよと云うたのと、懷海が却つて會せずと云うた、それを比較して、二人の禪機の優劣を審判したものである。」と。是れは井上君の無說無示底の垂示である。

宗演師云く、「此の馬大師の評語が亦頗る味がある。即ち智藏の頭は大分白くなつたが、海兄の方はまだ黒い。是れは宗旨上の符號でも何でもない。又字義上からかれこれ穿鑿すべき事柄でもない。敎相的に、黒と云ふはカウで白と云うたはア、だ、と色々義理を附けてコネクリ廻せば白雲萬里、宗旨の那邊に存するかを認むること難しちや。」と。是れは宗演師の無說無示底の言語。——

以上諸君が本則研究の一助に老婆した次第。衲は目下本則につき研究中。易分霜裏粉、難辨雪中梅。

◎頌

藏頭白海頭黒、明眼衲僧會不得、馬駒踏殺天下人、臨濟未是白拈賊、離四句絶百非、天上人間唯我知、』

藏頭は白く海頭は黑し、明眼の衲僧も會することを得ず。馬駒踏殺せり天下の人。臨濟は未だ是れ白拈賊にあらず。四句を離れ百非を絶す、天上人間唯我知る。』

字解。

會不得、』會することを得ずである。

馬駒踏殺天下人、』六祖大師が弟子の南岳に向つて、向後佛法從汝邊去、己後出一馬駒、踏殺天下人、と云はれた、これは傳說、自分の法孫馬祖道一の出世を豫言したものなり、と。此の意味を雪竇禪師が轉用して馬大師の禪機を稱揚したのである。

白拈賊、』白晝公然と人の物を取る泥坊の意味。蓋し唐宋時代の俗言ならん。雪峰が三聖から臨濟禪師の赤肉團上云々の垂示を聞いて、曰く、「臨濟大似白拈賊。」と。是れに基きたるものならん。

天上人間、』佛敎で說く十界中の天上界、人間界を指したものの。意味は、世界に於て、である。

我知、』自知、自覺の義なり。

提講。

本則にある馬大師の言葉そのまゝであるが、一回擧着すれば一回新なり、で、決して馬大師の口まねではない。雪竇禪師の

藏頭白、海頭黑である。否、曇華の藏頭白、海頭黑である。此の一句に四句を離れ百非を絶した西來意が無說無示に露堂々であることを無聞無得の中に聞きもし會得もしなければならぬ。

――圓悟禪師は此の藏頭白海頭黑の一句を賞讃して、金聲玉振、と下言されたは可謂、鐘聲は舊寺より來り、月色は新地に下る、と。抑〻西來意は會不會を超脫したる消息である。その超脫したる消息を藏頭白、海頭黑と拈唱したのであるから、明眼の衲僧も會不會は當然。故に圓悟禪師曰く、「更に行脚すること三十年せよ。」と。三十年が百年でも依然として西來意は會不會である。故に山僧是れ口、匾擔に似たり、と自白してある。

圓悟禪師に限らず釋迦でも達磨でも口は開けぬ。――

サスガ馬大師だ。我今日勞倦、不能爲汝說、と會不會の本領を脫體現成した處は、眞に馬駒天下の人を踏殺せり。――聞く、臨濟禪師も天下に隱れなき有名な白拈賊であるが、上には上があるもので、馬大師の面前に出ては白拈賊の價値なし。天下無類の大白拈賊は馬大師である。雪竇禪師、轉一轉して曰く、「離四句絕百非、其のやうなことは自己自身が研究して冷暖自知すべきもので、聞いてわかるものでなし。問はれ答へられるものでないと云ふ意味を貫徹せんが爲に、天上人間唯我知、と結ばれた。」(我を自と見るべし。)如何にも然りである。――

他の事柄はともかくも、西來意そのものは自知自得するより外に道なし。自知自得してこそ眞箇西來意が我物になる。然らざれば西來意の借用品。借用品ではイザと云ふ場合の役にたゝぬ。――昔は知らず、昨今は西來意の借用者が多い。隨つて西來意を貸し出す人も少くない。嗚呼、と長大息せざるを得ず。之是の長大息は西來意の外か、――四句百非の內か、――諸君の答を待つ。――

唯我知、』此の唯我知と云ふ字面から見ると、雪竇禪師、自分は能く承知して居るが他の人は承知して居るまい、と云ふ樣に聞える。故に圜悟禪師、雪竇禪師に向つて、「唯我知と云はるゝが其の我を用ひて什麼か作さん。」と注意をされた。由來、知るべき者がどこにある。我、それがどこにある。雪竇禪師は拄杖子を奪却された。――

雪竇禪師は雪竇禪師、圜悟禪師は圜悟禪師。各々其の場、其の處に立つて西來意の端的を横拈倒用してをらるゝこと、馬大師、智藏、懷海と蓋し難兄難弟である。――されど當初只道茅長短、燒了方知地不平。――

更に初學者の爲に、天童禪師の頌を添へておきます。

藥之作病、鑒乎前聖、病之作醫、必也其誰、白頭黑頭兮克家之子、有句無句截流之機、堂々坐斷舌頭路、應笑毘耶老

古錐、』

讀方

藥の病と作る、前聖に鑒む。病の醫と作る、必ずや其れ誰ぞ。白頭黑頭克家の子。有句無句截流の機。堂々として坐斷す舌頭の路。笑ふべし毘耶の老古錐。』

藥之作病、鑒乎前聖、』用ひ方に依つて藥にもなれば毒にもなる。法も亦然り、用ひ方に依つて善にもなれば惡にもなる。馬大師の、我今日勞倦不能爲汝說、と云はれた簡單なる此の句、毒と云へば毒、藥と云へば藥。善にも惡にも要は使用の如何にある。

白頭黑頭克家之子、』是れは智藏と懷海、兩人の禪機を審判して馬大師が藏頭白、海頭黑と云はれた、其の黑白兩人は馬大師の家風を起すに十分の力量がある、と賞讃し、その所以は、

有句無句截流之機、』一人は勞倦、――一人は頭痛、――一人は不會。――その禪機は有句にして無句、無句にして有句。有句無句の兩頭をみごとに截斷したる處が論より證據である。――信ぜざれば看よ。我勞倦、今日頭痛、却不會、と云はれた一句下に於て問僧、開いた口が其まゝ。之是を堂々坐斷舌頭路、と吟じられた。必ずしも當時の問僧に限らず、何人でも、勞倦頭痛却不會に逢うたら、平乞頓首の外、致し方なし。

是れにつき記憶を喚び起した。毘耶城に居られた維摩の老古錐が文殊の不二法門の問に默然を以て答へたと云ふが、實に笑ふべきことである。

『應笑毘耶老古錐、――維摩も默然でなく無舌の舌を以て說けば沈默を守る必要はなきに、何たる不調法をしたものだ、と維摩を抑へ、馬大師親子三人を托上した。天童禪師の心底は那邊にあるや、共に研究すべきである。――雪竇禪師の頌と天童禪師の頌と、兩鏡相對して中心影像なし、と云ふべし。

（昭和十四年十一月二十五日講演）

397
432

昭和十五年二月三日印刷
昭和十五年二月十日發行

著作兼發行兼印刷者　佐々木四郎
東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社內

發行所　東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社考査課

終